



溪流釣りの楽しみ



東海学院大学人間関係学部 教授

宮本邦雄 (みやもと くにお)

筑波大学大学院博士課程心理学研究科修了。東海女子大学文学部講師，助教授を経て現職。専門は比較心理学，発達心理学。著書は『基礎心理学』（分担執筆，ソフィア），『心理学実験を学ぼう！』（分担執筆，金剛出版）など。

雪どけの頃になると，むずむずと溪流釣りの虫が動き出します。ここ 20 年ほど私の最高の楽しみは溪流釣り。春・夏・秋のシーズンを通して数回は溪に出かけます。ある週末の釣りの一日を紹介したいと思います。

わくわくしながら迎える釣行の当日は 5 時前に起床。朝食をすませ，長良川上流へ向かいます。私が住んでいる岐阜市を流れる清流長良川の上流には多くの支流があり，さらにその奥の谷間にはアマゴやイワナの絶好のポイントが隠れているのです。

そうした支沢に沿った林道を登っていき，予定の場所で車から降りますと，小鳥のさえずりと溪のせせらぎが聞こえてきます。準備を整え，さあ出発。苔むした岩々の間を白いしぶきを上げて清冽な流れが迎えてくれます。

6 メートルの竿を出して，餌をかけ第一投。流芯の横を上流から流れに乗せて落とします……とすぐに，グッゲーと強い引き。寄せてみると綺麗なパーマークのアマゴ手のひらサイズ。幸先良しと，1 匹キープ。1 匹釣れるとそのポイントは終了し，次の落ち込みへと移動します。溪流釣りは上流へとどんどん登りながら釣っていく攻撃型の釣りなのです。



大岩を迂回していくと，次のポイントはこんもりとした大きな枝が影をつくり，いかにも大物が潜んでいそうなゆるやかな流れ。そっと接近し頭上の枝を避けて上流から糸を投入。一投目は反応なし，おかしい。さらに奥の大きな岩の落ち込みから流すと，グーッと大きなあたり。ガッとフックさせると，スーッと糸が引き込まれます。しなる竿を立て，魚が岩の下へ逃げ込んで糸を切られないように泳がせながら魚体を浮かせていきます。そんな十数秒のやり取りの後，良形のイワナをゲット。

支流によって比率は異なりますが，溪流魚はアマゴとイワナです。アマゴは威風堂々，流れの中心で餌の到来をまち，2，3 度つついてガッと喰らい付く感じ。イワナは流れの周りの岩の下に隠れ，餌食の落下にいち早く接近し，一気に飲み込む（見たわけではありませんが）。イワナは餌に何度もトライしますが，アマゴはおかしいと思ったら絶対にひっかかりません。大物のアマゴがちょっと餌に触っただけで，サーと岩の下に逃げこむのを何回目撃したことか……。溪流魚の比較心理学は奥が深いのです。

源流部に近い上流まで釣りあがって行くと，どっしりと年輪を重ねた老木や苔むした大岩の重なり，行く手をさえぎる灌木，しぶきを上げる滝などが次々と現れます。警戒心の鋭い溪流魚は，ちょっとした動きや振動や枝の動きに敏感で，慎重なアクセスが必要。こ

こというポイントでは，腰をかかめてそっと竿を出していきます。

こうして昼頃まで釣りあがり，汗を涼風で抑えながら食するおにぎりの味はまた格別です。昼を過ぎると釣りは終了。一休みの後，溪から林道に登り，ぶらぶらと景色を楽しみながら下っていくことになります。早朝からの活動で疲労が蓄積し，そのまま帰途につくと車中にて睡魔との闘いとあいなります。幸い飛騨地方はあちこちに手ごろな温泉がありますので，ポーツと湯に浸かりひと眠りしていくこともしばしば。

溪流釣りの楽しみは，幻の大イワナや幅広アマゴを釣り上げることばかりではありません。四季折々を彩る花々や野草に目を奪われたり，コシアブラや山ウドなどの山菜を採ったり，カモシカやイノシシに出くわしたりすることも楽しいものです。また長年，里山に通っていると山村の変化も気になります。以前は立派な段々畑であったところが，人手が入らなくなると，まずイノシシのヌタ場になり，草に覆われ，数年で林になってしまいます。

私にとって溪流釣りは，何もかも忘れて自然の中で集中できる貴重な時間。これからも安全第一を心がけて，楽しみたいと思います。

